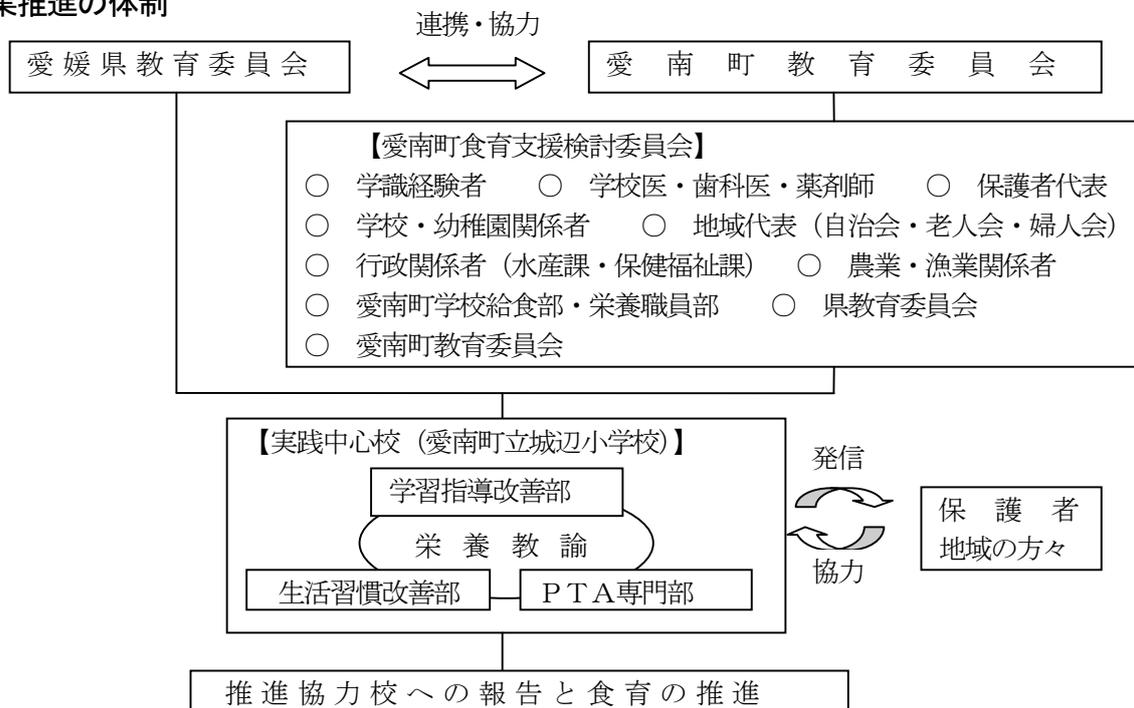


再委託先名	愛南町
-------	-----

1. 事業推進の体制



2. 事業内容

テーマ1	みんなで考える食育…よりよい食生活の在り方を探求させ、食に関する実践力を育む学習指導の改善
<p>1 地域から学ぶ食育単元</p> <p>1年目の取組を踏まえた上で、地域の食材や地域で食にかかわる人々、また、地域の食に関する文化等を食育単元に取り込み、系統的な食育指導を進めている。その際には、昨年度作成した各学年の指導指標・成果指標を活用し授業実践した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 例…第3学年食育単元「ふるさと大好き」で学んでいたかつお漁に、地域の歴史的文化「城辺骨抜き唄」の学習を加える。 <p>2 児童の食生活につながる授業の工夫</p> <p>児童が、食生活への技能・知識を身に付けるだけでなく、食に関する思考力・判断力を高め、自分の生活へ生かしていくことができるように、以下のような授業研究の視点を設け、城辺地域各校で共通実践し、情報を持ち寄った。</p> <p>【研究の視点1】 ○ 思考力、判断力を育てる教材の工夫</p> <p>【研究の視点2】 ○ 児童の言語活動を活性化させる発問の工夫</p> <p>【研究の視点3】 ○ 児童の食生活につながる学習展開の工夫</p> <p>3 作る人の気持ちを学ぶ弁当作り・・・弁当の日</p> <p>昨年度6年生が取り組んだ「家族の思いに気づく弁当作り」を、今年度は全校児童へと広げた。最終的に『自分の力だけで弁当を作る』を目標に、段階的チャレンジ項目を設定した。そして、発達段階に応じた取組を、家庭の協力を得ながら実践していった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 5月9・10日・・・初めてのお弁当作り ○ 6月10日・・・愛南町の食材を使おう ○ 10月・・・元気が出るお弁当 ○ 3学期・・・独り立ち弁当〔6年〕 <p style="text-align: right; margin-right: 50px;">ステップアップ弁当〔1～5年〕</p>	<div style="text-align: right;">  <p>【城辺骨抜き唄に出てくるかつおを直接触る児童達】</p> </div> <div style="text-align: right; margin-top: 20px;">  <p>【授業研究の一端…郷土料理を類型化する活動】</p> </div>

テーマ2

五感で味わう食育…食を通して人やものとかかわり合う意義や喜びを理解させる給食時間の工夫

1 楽しい会食の在り方を考える給食指導

○ はしの持ち方の個別指導

昨年からずっと、はしの持ち方について、毎月4と8のつく日を「はしの日」と決め、栄養教諭が各教室を回り、児童の様子を観察してきた。児童一人ひとりはしの持ち方を個別カードに記録させ、全校児童の9割以上が正しいはしの持ち方ができるようにさせたいと考えた。

給食のはしが全児童の手のサイズに合ったものではないため、「はしの日」や「おはしコンテスト」の際には、『マイはし』を持ってこさせ、はしの使い方を意識させた。

○ コミュニケーションを促す給食の時間

楽しく会食するためには、「最低限のきまりを自分たちで考える」ことも必要だと考える。学年によって、以下のようなきまりが生まれてきた。

【低学年】○ 時間までに、残さず食べる。 ○ 姿勢よく食べる。

【中学年】○ はしの使い方を守る。 ○ よくかんで食べる。

【高学年】○ 苦手なものも工夫して食べる。

会食のきまりをまもる一方で、コミュニケーションのスキルも身に付けなければ、楽しい会食とはならない。

【コミュニケーションを活性化させる工夫】

- 話す場の受容的雰囲気…教師が児童と共に気持ちよく話ができる教室の雰囲気をつくる。
- 話し手・聞き手のスキル…態度や表現力、話し方を身に付ける。相手に応じて話し方を変える。
- 話題の選択… 自分の家族 ・ 自分の好きなもの ・ 昨日見たテレビ番組など

2 児童の食の体験を広げる献立の開発

学校給食を生きた教材として活用するために、栄養教諭が幅広い食体験を児童に保障する献立の工夫を行った。

- 日本各地の郷土料理や、実際には行くことが難しい世界各国の献立を取り入れる。
- カツオをはじめとする地域食材を使ったメニューの工夫。
- 保護者の声を生かした新メニューの開発。



【はしの持ち方を指導】



【笑顔の給食の時間】

テーマ3

家庭と続ける食育…学校と家庭が協力し、将来における児童の食習慣の基礎を培う食育の充実

1 楽しみながら食生活を変える食育活動の推進

○ 手前みそ造りで健康的な食生活に

手前みそという言葉は、「自分で自分のことを褒める」慣用句として使われている。高学年では、みそ作りを通して、伝統的な日本食に興味をもち、その効用の高さを実感して、日本食文化への誇りをもった食習慣育成を目指してきた。

2 家庭や地域をつなぐ食育の実践

○ 親子料理体験

家庭での親子料理は、児童にとってかけがえのない食の体験となる。夏休み中には、親子で、またはおばあちゃんたちと一緒に料理を作り、その体験を新聞や作文にまとめた。この体験により、さらに家族の絆が深まったと思われる。

○ 食に関する人材バンクの活用

昨年度に引き続き、本年度も校内の人材バンクを活用し、食に関する指導のサポート役に、地域の方々の協力を得た。

【人材バンクを活用した活動】

- ・ 地域の生産者に学ぶばくばく放送
- ・ 老人会の方々とのもちつき
- ・ 婦人会の方々と七草粥
- ・ 食生活改善推進協議会との郷土料理
- ・ 地域の名人によるみそ造り

○ 保護者との個別相談の実施

肥満傾向の児童の保護者を対象に、児童の健康的な体づくりを目的として、栄養教諭・養護教諭が連携し、個別相談を行った。

家庭を巻き込んで、食事・運動・休養のバランスを意識した無理のない取組に留意しながら、話し合いを進めてきた。

- ・ 具体的指導…年齢に応じて食べる量が異なることが一目で分かるように、5種類の大きさの弁当箱を用意する等。



【婦人会による七草粥の調理指導】

テーマ1～3に共通する具体的取組

1 児童の食生活の実態調査と分析

食に関するアンケート調査を、2年間に渡って実施した。アンケート結果を比較することで、食生活や食に関する意識の実態が明らかとなり、本研究の成果と課題を分析した。

2 食育支援検討委員会の実施

平成23年度内に2回、平成24年度に入ると5月と1月に食育支援検討委員会を開いた。研究の課題と取組内容について出席者全員で確認した。「弁当の日の取組がすばらしい。子どもの意識、親の意識がよりよく変容している。さらに、連携の継続が求められる。今後も10年先の子どもを育てる、という意気込みで食育に取り組み続けよう。」といった意見が出された。

3 共通実践に取り組んだ協力校の実践

(1) 楽しんで食の実践力を身に付ける学習指導の研究

【東海小学校】○成果と△課題

- 旬の野菜や郷土の海産物へ関心の深まり
- 調理名や多様な調理方法や献立についての知識を習得
- 正しい食生活が自分たちの心身の成長を担っていることの理解
- △ 朝食の内容や、孤食による栄養の偏り
- △ 学習したことを自分の生活に生かそうとする態度の育成

【城辺中学校】○成果と△課題

- 食生活の振り返とその改善に向けた意識付け
- 食生活改善の工夫
- △ 学習を生かした家庭での実践
- △ 食に関する知識や技能の育成及び食分野の学習の定着

(2) 食について興味・関心を培い、会食の楽しさを味わわせる給食時間の工夫

【久良小学校】○成果と△課題

- 感謝の気持ちや、偏食をなくそうという態度の育成
- はしの持ち方に注意して給食を食べようとする児童の増加
- △ 栄養教諭と連携した全体指導や個別指導
- △ 学校と家庭が連携した食事のマナー指導

【僧都小学校】○成果と△課題

- 食に関する興味・関心の高まり、感謝の気持ちや態度の育成
- △ 給食時間を通じた多様な人とのふれあい
- △ きまりを守りながら会食する楽しい給食時間の工夫
- △ 正しい食生活の習慣化への意識づけと家庭への啓発

(3) 楽しみながら食生活を変える運動の推進

【緑小学校】○成果と△課題

- 定期的な活動による食に関する意識の向上
- 家族や生産者に対する感謝の気持ちの育成
- 食品に対する安全管理の指導が徹底
- △ 児童を通じた家庭へ働きかける手立て
- △ 栄養教諭と連携した食の関心を高める継続的な活動

4 子どもの健康を育む総合食育推進事業研究発表大会を開催

10月24日(水)城辺小学校にて、この2年間の研究の成果を問う標記の大会を開催した。100名近い参加者を得て、全学級が授業を公開した。全体会では、基調提案となる研究発表の後質疑応答し、指導助言を受けた。その後の内田美智代助産師の講演は感動を呼び、保護者の多くが感涙でいっぱいだった。

5 指導者の資質向上を目指した先進地視察など

- ・ 7月6日 奄美市栄養教諭を中核とした食育推進検討委員会(鹿児島) 栄養教諭1名参加
- ・ 11月30日 食育関係事業全国連絡協議会 2名参加

本事業における評価指標と考察

【食育アンケート 平成23年6月と平成24年7月の比較（対象：全校児童）】

1	朝食摂取率の変化	毎日食べている児童	87.9% → 91.9%
2	給食への関心の変化	給食がとても楽しい	61.7% → 72.8%
		楽しい理由：みんなと一緒に食べられるから	112人 → 168人
3	感謝の気持ちの芽生え	出されたものは残さず食べる	99人 → 116人
4	栄養バランスへの関心	栄養バランスよく食べるよう気を付けている	106人 → 121人
5	はしの持ち方への意識	正しい箸の持ち方ができている	69.4% → 75.6%

【給食センター残食結果 平成23年4月と9月の比較（対象：全学級）】

1	残食率の減少		0.99% → 0.76%
---	--------	--	---------------

【保護者食育アンケートの結果 2年間の比較】

- 1 栄養バランスに注意して食事を作っている・・・10%増
- 2 「子どもと料理を作ることがほとんどない」・・・10%減
- 3 正しいはしの持ち方について声掛けをする・・・10%増

※ 子どもたちの食に関する意識は随分と向上していることが分かる。ただし、アンケート等の結果を細かく見ていくと、食に関する課題を全ての家庭に理解していただくには、まだまだ時間がかかることも分かった。そのため、PTA専門部や学級PTAの活動と連携しながら、継続的かつ自主的にものとなるよう働きかけていきたい。

【学校給食の地場産物活用率】 平成23年度：37.6% → 平成24年度：39.4%

本事業の成果

1 みんなで考える食育の推進

全校児童に弁当作りをさせたことは、自分から進んで食について考え、かかわろうとするよいきっかけとなった。また、そのことで、家族とのかかわりが深まったり、友達との意義ある共有体験として食育実践化への意欲が高まったりした。

地域食材に目を向け、児童の発達段階に合わせた地域体験学習を実践したことで、系統的で効果的な指導ができた。

2 五感で味わう食育

保育所と連携した「はしの持ち方」の継続的な指導や、児童会が率先した会食のマナーについて考える実践などで、食事のよりよい雰囲気作りなどまで児童の意識が高まっていった。

毎日の給食放送や掲示を通して、食材の生産者や給食調理員の思いまで知り、給食の残食率が大幅に低下した。

3 家族と続ける食育

親子がともに食の問題について考えたり、親子で一緒に料理をしたりする活動を多く取り入れた。その結果、家庭での自主的な食育活動が夏休みに実践されたり、親子料理教室への参加希望が2倍に増えたりした。また、PTA専門部が協力して朝食レシピを広報誌に掲載するなど、食育啓発に保護者が進んでかかわるようになった。

今後の課題(今回の事業を実施した結果、新たに見えた課題)

☆ 家庭・地域との連携

朝食を毎日食べる児童が増加したり、弁当作りなどの食の体験活動から教育効果が上がったり、といった成果を見つめた際に、いかに家庭・地域との連携が重要であるか再認識された。今後も継続的な実践と分析が必要である。また、自主的なPTA活動の運営とも連動した実践も探していきたい。

☆ 更なる人とのかかわり合い

「食べる」という活動においては、『なにを』『だれと』『どのように』食べるのが大変重要であることが分かった。食卓での目の前の人や、食材の向こうに見える人など、多くの人とのかかわりこそを大切にしたい。そのために、食育の視点をもって学級経営していく実践が問われていると考える。

☆ 教育委員会のリーダーシップ

「命」を育む食育の重要性ははっきりと理解できた。全町挙げて取り組むべき課題である。

愛南町として平成16年度から取り組んでいる食育推進事業を、水産課のぎょしょく教育とも絡めながら、今後も指定研究を続けたり、この2年間の成果を広く全校へ伝えたりしながら、組織だった取組を展開していくべきである。

例・・・全町一斉「弁当の日」の取組

☆今後具体的に取り組んでいこうとする実践

1 広げる実践

① 指導・成果指標の改善

育てたい児童像をゴールに見据え、よりよい指導内容の明確化を図る。

② 指導案モデルに基づく授業実践

食育推進の方向性を構造化し、児童を評価基準に近づける評価言を活用する。

③ 幼・保・小・中の指導者交流

給食指導の在り方を中心に、食育全般について定期的な交流の場をもつ。

④ 保護者との個別相談

児童の成長や子育てに不安のある保護者と食育に関する情報を共有化する。

2 続ける実践

① 食育の授業力向上のための研究

児童が自分の食生活について進んで考える教材の活用、発問、展開の工夫に努める。

② 食材や生産者、調理者をつなぐ広報活動

地域ぐるみで児童の食について協力するネットワークを広げていく。

③ お弁当の日

自他の食との関わりを考え、深い愛情を育てるための実践力を培う。

3 深める実践

① 体験的な活動を軸にした考える食育の推進

「ぎょしょく」や地域体験学習をもとに思考の深まりをもたせる学習活動を構築する。

② 栄養教諭と他の教諭との連携協力

児童の実態と発達段階に即した体系的かつ効果的な食の指導の在り方を探る。

③ 学校・保護者・地域による目的の共有

児童の10年後に確かな食の力を身に付けさせる目的を共有しながら食育を進める。